

特別講演 2

北海道の植物と植生(偏見あり)

Plants and vegetation in Hokkaido (Biased)

露崎史朗

北海道大学大学院地球環境科学研究院

Shiro Tsuyuzaki

Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University

自分にとって「箱根を越えると日本ではない」と言えるくらい、その辺を境に植物も植生も別な世界が広がっている。一方、アラスカの森林火災跡地の調査に行ったときには、火災がなければ、これらの調査は全部北海道でできる、と言える位に、北海道と似た植物が生えていた。なぜ、北海道から見ると距離的に近い箱根が異国で、アラスカが同国に感じるのだろうか。北海道の景観、植生、植物が、内地と異なる理由としては、南に行くと見られない植物が数多く生きていることはもちろんだが、その植物の分布には過去の歴史が大きく関与している。それらの点を含め、北海道の植物と植生の特徴を、多少の偏見を交えつつ紹介したい。

巨視的なレベルでは、北海道への植物の侵入がどのように起こったかを見ておくのがいい。生物地理的な観点からは、北海道と本州の境には、ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンカモシカなどの主に哺乳類の分布境界となるブラキストン線(津軽海峡線)がある。この線の形成には1万年前まで津軽海峡を越えて、北から南へ南から北へ移動した哺乳類が少ないことと、北海道は千島列島を経由してアジア大陸と繋がっていたことで説明される。同様に、植物にもいくつかの分布境界があって、黒松内低地帯は、白神山地で有名なブナの北限、札幌を含めた石狩低地帯はトチノキ、クリ、スギなどの分布北限である。針広混交林という植生は、日本では北海道でしか見られない、トドマツ、エゾマツなどの常緑針葉樹とミズナラ、ハリギリ、シナノキ、カンバなどの落葉広葉樹を交えた独特の森林である。本州中部では、低地から高地に向かう植生の垂直分布は、低地帯、山地帯、亜高山帯、高山帯と変化し、亜高山帯の部分が針葉樹林となる。北海道では、この亜高山帯に相当する部分に針広混交林が発達している。この分布には200万年前から現在に至るまでの歴史で説明される。

これらに加えて、北海道は、明治維新以降に主に開発が進んだという、比較的短い時間の要因が組み合わさって形成されている。開発が進む前には、北海道には広大な湿原が広がっていた。札幌

を含めた石狩低地帯では、湿原の一種である泥炭地は 1870 年に 50690 ha あったが 1960 年までに 119 ha まで減少した。即ち、99.8%の泥炭地が消失してしまった。それでも、北大には、ハルニレ (エルム)、ヤチダモ、ヤチハンノキなどの湿性を好む樹木の原木が、いまだに見られる。これは北大キャンパス設立以前は、湿原であった頃の名残である。このように、様々な時間長さに応じて植物が分布し植生が変化している。さらに、火山の影響は、北海道全域に広がっている。湿原の調査をしていても、泥炭断面には火山灰層が含まれていることは普通にある。そして、近年の人為の影響は著しく、人新世と呼ばれる時代に突入した。ここでは、自分が今まで調べてきた有珠山における火山遷移の特徴を示す。

これらが複合し形成されてきた、北海道の自然のいくつかをトピック的に紹介する予定である。最後になるが、これらの多くが気候変動により絶滅、消滅の危機に晒されていることに触れる。本講演が、北海道を楽しむ上で、少しでも役に立てば幸いである。